# メキシコ近代建築における「感情的建築」思想の様相

東俊一郎（Universidad de Monterrey）

２０世紀以降のメキシコ近代建築は、政府主導による壁画運動の影響とヨーロッパ機能主義の受容を起点として発展した。美術家マティアス・ゲーリッツおよび建築家ルイス・バラガンは、人間不在の合理主義偏重の状況を危惧し、建築が人間感情に作用する必要性を重視する「Arquitectura Emocional (以下、感情的建築)」思想を唱えた。

本稿では、メキシコ近代建築の潮流における「感情的建築」思想の位置づけを整理する。続いて、「感情的建築」思想におけるゲーリッツとバラガンの共通性と独自性を明らかにすることで、その思想の理解を深めることを試みる。調査では、「感情的建築のマニフェスト（1952)」およびバラガンの「プリツカー受賞講演（1980)」を中心に関連資料の分析を行う。

①　思想の位置付け

革命期以降のメキシコ建築史では、欧米からもたらされたモダニズムの受容が主要なテーマである。1910～1920 年代は、政治的イデオロギーを発信するために、モダニズムと壁画運動との統合が見られた。1930 年代は、急激に拡大する都市を整備するために、モダニズムと公共建築との統合が見られ、大規模施設の建設が政府主導によって進められた。1940 年代以降は、経済成長を背景に個人や民間企業がモダニズムと伝統文化との統合を牽引するなかで、バラガン自邸（1948）とエルエコの実験美術館（1952）に代表される「感情的建築」が生まれた。

②　思想の共通性と独自性

ゲーリッツとバラガンの「感情的建築」思想に関する言説の比較分析によると、両者とも建築が人間感情に作用することを重視している点と、信仰に基づく美的要素が主題となっている点が共通している。一方、両者が求める人間感情の状態は異なっており、ゲーリッツは、建築に大衆の感情に感動を呼び起こす社会的機能を求め、信仰の対象となるような象徴的で巨大な建築物を目指した。バラガンは、建築に神との個人的な対話が行える静謐な空間を求め、堅牢な壁に守られた修道院のように私的な閉鎖空間を作り上げた。

「感情的建築」思想は、政府主導から個人主導の建築への過渡期に生まれたモダニズムと伝統文化の融合した建築思想と位置づけられる。ゲーリッツとバラガンは両者ともに建築による人間感情への作用と信仰に基づく美的要素が軸となっているものの、ゲーリッツは集団を対象とした動的で大胆な感情的作用を求め、バラガンは個人を対象とした静的な感情的作用を求めるなど両者の思想の異同を整理した。

# 食をとおして Costa “Rica” の先住民／非先住民関係を考える
## ―Sikwa Restaurante のオンライン調査から―

額田有美（大阪大学）

本報告では、2020 年から 2022 年に行った SNS を用いたオンライン調査の結果にもとづき、コスタリカの首都サンホセにあるレストラン兼ガストロノミーに関する教育情報センター「シクワ・レストラン（Sikwa Restaurante）」の取り組みを考察する。

21 世紀に入ってからのコスタリカでは、これまで不可視化されてきた「先住民である」と自認する人びとやその文化遺産への注目が高まっている。食文化もその 1 つである。シクワ・レストランは、タラマンカ地方の先住民居住区を訪問し、食に関する知識や実践を学んできた 1 人のシクワ（ブリブリ語で「非先住民」を指す語）――パブロ・ボニージャ――によって 2018 年に開かれた。

シクワ・レストランにみられるような先住民的な食文化を可視化し称揚するさまざまな動きは他国でも報告されており、研究者の考察の対象となっている。たとえばペルーにルーツをもつ人類学者 García（2021）は、ペルーでは現在も植民地主義的な先住民と非先住民との関係が多かれ少なかれ再生産され続けていることを、世界的に有名なペルー人シェフたち―― ガストン・アクリオやビルヒリオ・マルティネス―― の描写をとおして指摘する。またその際、シェフたちが辺境地域の食材を「発見」し、調理法に関する「彼女・彼ら」の知識を獲得し、「私たち」都市の客へ提供する姿とサルベージ人類学者の姿とを連想させる。地域研究者 López-Canales（2019）も、ペルー人シェフのビルヒリオ・マルティネスの取り組みを批判的に考察するが、マルティネスがクスコに開店したレストランやそこでの取り組みの意義については評価を保留にしている。

本報告は、食分野での先住民性の可視化や称揚について論じた人類学者や地域研究者の研究を踏まえながら、コスタリカのシクワ・レストランの事例を考察する。とりわけ、オーナーシェフであるボニージャがこのレストランに込めた想いと、利用客が感じたこのレストランの価値や意味とを比較することで、今日のコスタリカ都市部において先住民／非先住民の関係がどのように構築されているのかを明らかにすることを試みる。

# ラテンアメリカのアルテ・ポプラル
## ―多様性と歴史性―

鈴木紀（国立民族学博物館／総合研究大学院大学）

本発表では、2023 年 3 月 16 日から 6 月 6 日まで国立民族学博物館で開催予定の特別展「ラテンアメリカの民衆芸術」のキュレーション作業の中間報告を行う。

同館の収蔵資料約 34 万 5 千点余りのうち、ラテンアメリカに関連するものは約 3 万 7 千点にのぼる。常設の展示場に並んでいるのは、その内の一部にすぎない。そのため来年の展覧会では、これまで来館者が見る機会のなかった 400 点ほどの資料を厳選し、展示を構成する予定である。

キュレーションの最大の課題は、どのようなテーマのもとに何を展示するかという問いである。これに対し、来館者が見て楽しめることを重視し、美意識に訴え、遊び心も感じられるアルテ・ポプラルに焦点をあてることにした。また特定国の資料に限定するのではなく、なるべく多くの国の資料を提示してラテンアメリカの文化的多様性を示すという方針を立てた。そして、その多様性を説明する根拠として次の 3 つの歴史過程を想定した。

第 1 に、コロンの航海以降 500 年余りにわたる文化変容の過程である。この間、アメリカ大陸各地の先住民文化とヨーロッパ、アフリカ、アジアの文化とが出会い、それらの間でさまざまな混淆と変容が生じた。展覧会では先スペイン期の石彫・土器・織物、現代の先住民の作品、再解釈されたキリスト教信仰、アフリカ系住民の作品、アジアの工芸品の影響などについて展示する。

第 2 に、20 世紀前半から現在に至る民衆芸術振興の過程である。この間、メキシコやペルーなど、いくつかの国々では、政府が国民文化のシンボルとして先住民文化や手工芸品に着目し、同時に主として農村地域の経済振興策の一環として手工芸品の生産を奨励した。この結果、美的に洗練され、商品価値の高い手工芸品が生産され、それに対して民衆芸術という呼称が使用されるようになった。展覧会では、すでに国際的な評価が確立している、民衆の暮らしを描いた絵画のギャラリーを設置する予定である。

第 3 に、20 世紀後半から現在まで展開してきた社会運動の過程である。1970 年代以降、軍事政権、対外債務危機、新自由主義による格差拡大などを背景に、民主化や人権尊重などを求める社会運動が活発化した。展覧会ではこうした運動の視覚的な戦略として制作された作品を展示する。

本発表を通じて、アルテ・ポプラルの多様性と歴史性だけでなく、展示のアイデアについても会員諸氏と意見交換ができれば幸いである。